

楽しく、豊かに ファッション商品の リサイクルの新たな動き

文◆阪井薫 フリーライター

リフォームで楽しく

近頃、ユニクロが自社の全商品の毎日回収を開始したり、タンス在庫を減らそうと百貨店が洋服の回収を始めて話題になった。逆に言えば、これが話題になるほど、ファッション分野のリサイクルは進んでいない。実際、現在、可燃ゴミとして消却されるアパレル製品は年間100万トンを超える。リサイクルが義務づけられている家電4品目の年間廃棄量、65万トンと比べても、驚くほど多い。意識している人は少ないが、燃やすだけで1キロあたり50円もの税金が使われているのだ。

そんな今、新しい視点でリサイクルに取り組み動きがある。そのキーワードは「リフォーム」「教育」「バイオエタノール」。ファッションビジネス学会の「アパレル・リサイクル研究部会」に参加する3人の専門家がキーワードとなり、連携しながら進めている。

今回お話を聞いたのは、「リフォーム」のキーワード、佃由紀子氏。リフォーム店5店舗を展開する株式会社ツクダ・クロス・スタイル代表取締役だ。佃氏は、3つのキーワードで、「ファッション製が循環すると、日本の生活スタイルが変わります」と言う。

現代のリフォームは、補修・修理、サイズ変更にとどまらず、デザイン変更やユニバーサルファッション提案など、幅広いサービスを提供してい

ツクダ・クロス・スタイルが提案するリフォーム例



流行に合わせて丈の長さを変えるだけで、今風のジャケット(右)に



着物から、ワンピースと共布のバッグに。着物の生地の良いさを活かしている



1度しか着ない服の代表格、ウエディングドレスはパンツスタイル(右)に

る。気に入っているのに着られなくなった洋服などに、技術者の手を加えることで、お気に入りとしてよみがえらせ、長く着てもらおうという視点である。

実は、ファストファッションが流行する一方で、自分だけのモノが欲しいというニーズも多い。若者世代は古着を「手くアレレンジして着ている今、推進のために開催した、リフォームのワークショップには多くの人が集まり、関心の高さを物語る。そこで佃氏はリフォームの普及を推進し、一方



今年2月に、ワンガリ・マータイ氏が来日した時のイベントで、マータイ氏の顔を刺繍したリサイクルネクタイを見せる木田氏。これはクールビスにも対応するクイックネクタイ。

で、需要を受け止める基盤の整備にも取り組もうとしている。約1万軒あるといわれるリフォーム業者は孤立し、業界団体も無い。消費者から見ると、どこに行けばいいのかわからない。適正な価格がいくらなのかわかりにくい。技術者の高齢化も深刻だ。佃氏曰く、「リフォームの業界では、技術者の育成が必要です。そして、今の時代に必要とされる技術を開発し、提供していくことが急務です」。

小学校からの教育で意識と技術を

技術者育成のためにも、「教育」は大切なキーワード。この分野の取り組みは、同学会の理事で、教育分野で実績を積んできた福水成明氏が担当。

福水氏は、最近では、ドレスメーカー服飾教育振興会が品川区・目黒区の小学生を対象に開催した「ドレメ・キッズスクール」を実現させている。これは子どもたちが、ミシンを使ってオリジナルの作品を作り、最後に作った作品で、ファッションショーを行うイベント。こうした機会があれば、

子どもは喜々として洋裁を楽しむ。ところが、学校での洋裁の授業は少なく、市井にも、ピアノ教室はあっても「洋裁教室」はほぼ無い。さらに家庭での洋裁のレベルもめっきり下がっている。

「当社の店舗に、小学校で使う雑巾を縫ってくと依頼する親がいる時代です。小学校から洋裁に触れ、モノづくりに興味をもった子どもは、専門教育を受けて技術者になってほしい。そうできなくても、直す・作り替えるという家庭洋裁の技術を向上させたいですね。すると家庭内での循環が成り立つだけでなく、プロの技術の価値もわかり、リフォームの需要も高まるはず」（佃氏）。

エネルギーを変えて、循環日本の生活スタイルを変える

そして、ファッション製品のリサイクルの環が完成するために、大きな役割をもつのが繊維から「バイオエタノール」を取り出す技術である。衣料品リサイクルシステムの研究開発に長年携わってきた、アパレル・リサイクル研究会会長、木田豊氏が担当。

現在、廃棄されている衣類の約6割が綿でできているそうだが、この技術では、その綿から焼酎づくりと似た方法でバイオエタノールを取り出す。木田氏によると最新値では、綿1トンから718リットルのエタノールの生産が可能（理論値）。木材から取るより効率がよく、トウモロコシのよ

うに、食糧とも重ならない。衣料にインテリアや工業製品まで含めて、廃棄される綿製品は、年間約120万トンだが、この全てをバイオエタノールにすると85万キロリットル（理論収率）。この数字は、政府がバイオマス・ニッポン総合戦略で掲げるバイオマスエタノールの生産目標の約7分の1にもなるのだ。

「毎年実る綿花から生産される綿製品は、ほとんど使って、古くなったら捨てる性質のもので、リサイクルの運動さえできればいいんです」と佃氏。そう言われれば、ファッション分野でリサイクルが進まなかった一因は、感覚的で流行があるファッショント、エコ活動が馴染まなかったからだろう。ダンスに眠っている服をオシャレにリフォームし、時には自分で創る楽しさを味わい、よく着る綿製品は着古したら罪悪感なく捨てられる仕組みができれば、これこそ、ファッション分野に馴染むリサイクルではないだろうか。

佃氏は、今、衣料品の回収まで行うリフォーム店を運営する新会社の設立を準備している。その社名は「Peace21」。2004年、環境分野の活動家として初めてノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイ女史が、自分のサインに記す「Peace」を社名にするだけに、思いは深い。

異なる分野で実績を積み上げてきたキーパーソンが結束して生み出す新しい波。日本の生活スタイルを変える日が来ることを期待したい。